

日本語の現場指示「この」「その」「あの」の選択(2)

——許容度と選択率から見た話し手の選択意識——

杉 村 泰

1. はじめに

本稿は杉村(2020)に引き続き、日本語の現場指示における「この」「その」「あの」の選択について考察したものである。本稿でも3種類のアンケート調査を利用して、言おうと思えば言えるかどうかを示す「許容度」と、実際にどれを選択するかを示す「選択率」の二つの観点から話者の頭の中にある「コソア」の選択意識にアプローチする。

2. 先行研究

現場指示について興味深い考察を行った研究に李(2010)がある。李(2010)は「筆者は実体験で、一緒に映画館で映画を見ている友人(日本人)が、映画の出演者を指差し「この人、誰?」というのを聞いて、なぜ映画の中の人物は物理的には遠いところにあるのに「あの」ではなく「この」という近称の指示語を使うのだろうか」と疑問に思ったことがある」(p.

表1 仮説に基づいた分類基準(李2010の表3)

現場指示の融合型				
場面の状況	問	場 面	指示対象	仮 説
目に見える 指示対象	問1	6畳の部屋	テレビ	A:実際の事物と画面の中の 人物の差
	問2	6畳の部屋	テレビの中の人物	
	問3	映画館	映画に出ている人物	B:障害物の有無の差
	問4	バス	バスの窓の外の大型スクリーンに映っている人	
	問9 問10	タクシー	20メートルくらい離れている建物	D:動的な空間と静的な空間 の差
目に見えない 指示対象	問5	友達の家	音楽	C:①回想文と推量文の差 ②推量文の中での事物の 特性や種類による差
	問6	友達の家	物が割れる音	
	問7	友達の家	動物の鳴き声	
	問8	友達の家	赤ちゃんの泣き声	

178) と述べ、「本研究の目的は現場指示（特に融合型）の使用実態調査により、韓国語母語話者と日本語母語話者の指示対象の捉え方、その認識のあり方（物理的・心理的遠近感覚）を把握し、両者の共通点及び相違点を探ることで、その成果を指示語の指導に貢献できる資料としたい」（p.178）として、表1の場面における日本語と韓国語の近称（코、이）・中称（소、구）・遠称（아、저）の選択傾向の違いについて論じている¹⁾。

これを受け、杉村（2016, 2017a-d）では例(1)のような二国会話を32場面設定し、中国人日本語学習者や韓国人日本語学習者のコソアの選択について考察した。李（2010）をはじめ従来の研究では話し手（第一話者（A））一人の発話しか見ていないが、杉村（2016, 2017a-d）では聞き手（第二話者（B））の発話も見ている点で特徴がある。

(1) [上空を飛んでいる鳥を見て]

A：(この、その、あの) 鳥の名前は何ですか？

B：(この、その、あの) 鳥の名前はコンドルです。



さらに杉村（2020）では、杉村（2016, 2017a-d）の問題文を一部変更したうえで、上のような「コソアの三者択一テスト」に加えて「コソアそれぞれの○×テスト」と「コソアの複数選択テスト」を作成し、3種類のアンケート調査の結果をもとに話者の頭の中にある「コソア」の選択意識について考察した。本稿はその続編である。

3. アンケート調査の概要

杉村（2020）では、表2に示す32の二国会話場面を設定し、そのうちの10の場面について考察した。これに続き、本稿では表2で網掛けをした12の場面について考察する。

表2 32場面の指示対象と分類基準（網掛けは本稿の考察対象）

	指示対象	分類基準
視 覚	上空を飛ぶ鳥 夜空の星	上空遠くの事物 (空をスクリーンに見立てる)
	遠くを歩く犬 近くを歩く犬	話し手や聞き手からの距離（遠近） ・話し手や聞き手に接していない
	第二話者の抱く子供 第一話者の抱く子供	所持物：人間・物・身体の一部 ・話し手または聞き手に接している
	第二話者の持つバッグ 第二話者の口の口紅	・話し手の領域か聞き手の領域か
	部屋の壁掛けテレビ 部屋のテレビ	実際の事物と画面の中の人物 ・垂直方向か水平方向か

	テレビ中の人物(2問) 映画中の人物(2問)	・画面までの距離が近いか遠いか ・画面の人物が心理的に近いか遠いか
	直接見た大型スクリーンの人物 窓越しに見た大型スクリーンの人物	・障害物の有無
	第一話者の子供の写真(2問) 第二話者の子供の写真(2問) 担任の先生の写真(2問)	写真中の人物 ・第一話者の子供か第二話者の子供か ・子供の事か先生のことか ・現在の事か過去の事か
聴覚	音楽(窓の外の演奏者) 未知	・音源が見えるかどうか ・音源が第二話者の側にあるかどうか ・その音が未知のものか既知のものか
	音楽(音のみ) 未知、既知	
	音楽(隣に演奏者がいる) 未知、既知	
嗅覚	におい(窓の外の料理人) 未知	・においの発生源が見えるかどうか ・発生源が第二話者の側にあるかどうか ・そのにおいが未知のものか既知のものか
	におい(においのみ) 未知、既知	
	におい(隣に料理人がいる) 未知、既知	

杉村(2020)では次の①～③の三つのアンケート調査を行った。本稿でもこの三つのアンケート調査の結果をもとに考察する。このうちテスト②は第二話者(B)については調査しにくい²⁾、第一話者(A)についてのみ調査した。以下、三つのアンケートの概要を示す。各問題文の横には、場面設定の補助として下のような挿絵を付けた。

テスト① コソアの三者択一テスト(選択率%)

(例) [上空を飛んでいる鳥を見て]

A:(この、その、あの)鳥の名前は何ですか?

B:(この、その、あの)鳥の名前はコンドルです。



- ・これは実際にどれが選択されるかを見るもので、被験者に「この」「その」「あの」のうち一番適切だと思うものを一つ選択させるテストである。
- ・「コソアそれぞれの選択数÷被験者数×100=選択率」とする。
- ・被験者：名古屋大学の学生(日本語母語話者)121人(2017年4～5月に実施)

テスト② コソアそれぞれの○×テスト(許容度%)

(例) [上空を飛んでいる鳥を見て]

A:この鳥の名前は何ですか?

(被験者毎に「この」「その」「あの」のどれか一つを与える)



- ・これは言おうと思えば言えるかどうかを見るもので、被験者に「この」「その」「あの」それぞれについて言えると思うなら (○)、言えないと思うなら (×) のどちらか一つを選択させるテストである。
- ・後の図の中では「(この、その、あの)」と三つ並べてあるが、実際のテストでは「A : この鳥の名前は何ですか?」のように一つだけ提示した。
- ・「コソアそれぞれの○の数÷被験者数×100=許容度」と見なす。
- ・被験者：名古屋大学の学生（日本語母語話者）
「この」の○×テスト 120人（2017年10月に実施）
「その」の○×テスト 124人（2017年10月に実施）
「あの」の○×テスト 125人（2017年10月に実施）

テスト③ コソアの複数選択テスト（選択率%）

(例) [上空を飛んでいる鳥を見て]

A : (この、その、あの) 鳥の名前は何ですか？

B : (この、その、あの) 鳥の名前はコンドルです。



- ・これも言おうと思えば言えるかどうかを見るもので、被験者に「この」「その」「あの」のうち言えると思うものを全て選択させるテストである。この点で②と似ているが、②はコソアのうち1つだけ見て○×を判断するのに対し、③はコソアの三つを比較しながら判断する点で違いがある。
- ・「コのみ」「ソのみ」「アのみ」「コとソ」「コとア」「ソとア」「コソア全て」について、「それぞれの選択数÷被験者数×100=選択率」として計算する。
- ・被験者：名古屋大学の学生（日本語母語話者）114人（2017年6月に実施）

4. 調査結果

本稿では3節の表2に示した32場面のうち、網掛けをした12の場面（以下の図1～12）について論じる。このうち、図1～12-1はテスト①の選択率を示したもの、図1～12-2はテスト②の許容度を示したもの、図1～12-3はテスト③の選択率を示したもので、それぞれ「A」は第一話者、「B」は第二話者を表す。以下、4.1では「指示対象が実際の事物の場合」、4.2では「指示対象が画面の中の人物の場合」、4.3では「障害物の有無が関わる場合（大型スクリーンの中の人物）」、4.4では「音の場合」、4.5では「にのおいの場合」について論じる。これらはいずれも対立型ではなく融合型の場面である。

4.1. 指示対象が実際の事物の場合

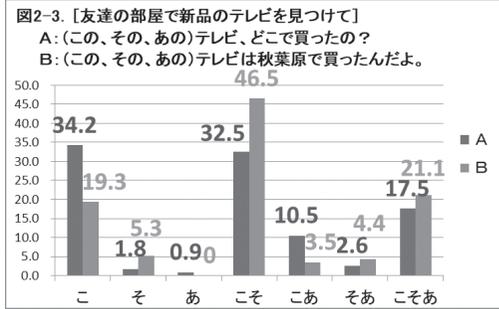
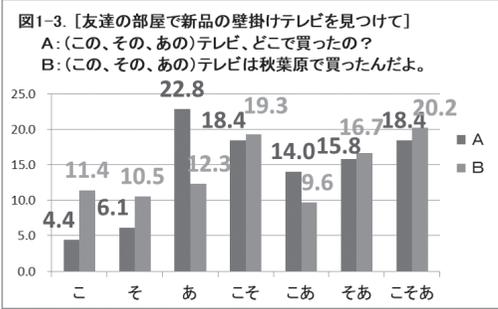
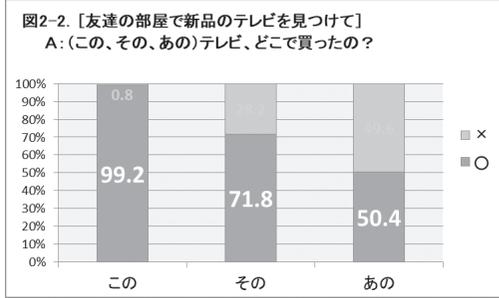
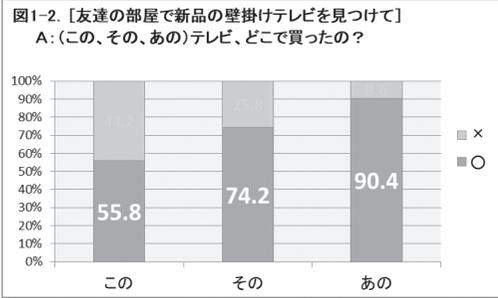
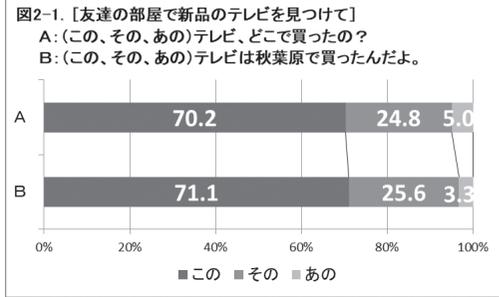
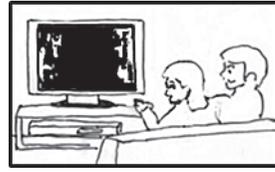
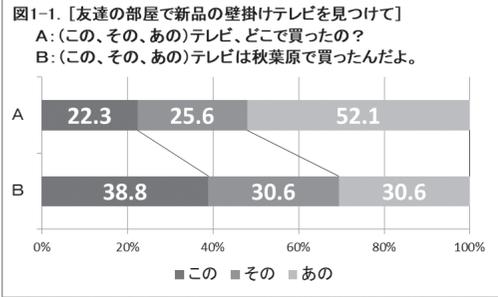
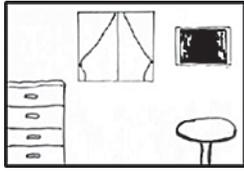
図1の「部屋の壁掛けテレビ」の場合、指示対象が話者の斜め上方向にある。この場合、第一話者は「この」「その」「あの」の選択率がおよそ1:1:2になっている(図1-1)。次に、コソアそれぞれの許容度を見ると、「この」は55.8%、「その」は74.2%、「あの」が90.4%となっており、対象を遠くに捉えるほど許容度が上がっている(図1-2)。次に、コソアの複数選択を見ると、7つの選択肢のどれも選ばれているが、「この」を含むものが合計55.2%、「その」を含むものが合計58.7%、「あの」を含むものが合計71.0%で、「あの」が最も高くなっている(図1-3)。このように指示対象が話者の斜め上方向にある場合、第一話者は「この」「その」「あの」の順に許容度も選択率も高くなっている。

一方、第二話者は「この」「その」「あの」の選択率がおよそ1:1:1になっている(図1-1)。次に、コソアの複数選択を見ると、「この」を含むものが合計60.5%、「その」を含むものが合計66.7%、「あの」を含むものが合計58.8%で、「その」が最も数値が高いものの第一話者ほどの差はない(図1-3)。この場合、第二話者も「この」「その」「あの」の選択が散らばるが、第一話者に比べて「この」の選択率が高く、「あの」の選択率が低くなっている。これは壁掛けテレビが第二話者の所有物であるため、第一話者より対象を身近に感じているためであると考えられる。

これに対し、図2の「部屋のテレビ」の場合、指示対象が話者の水平方向にある。この場合、第一話者は「この」「その」「あの」の選択率がおよそ15:5:1で、圧倒的に「この」の選択率が高くなっている(図2-1)。次に、コソアそれぞれの許容度を見ると、「この」は99.2%、「その」は71.8%、「あの」が50.4%となっており、対象を近くに捉えるほど許容度が上がっている(図2-2)。次に、コソアの複数選択を見ると、「コのみ」が34.2%、「コとソ」が32.5%、「コソア」が17.5%という順になっており、「コ」を含むもので94.7%を占めている(図2-3)。このように指示対象が話者の水平方向にある場合、第一話者は「あの」「その」「この」の順に許容度も選択率も高くなっている。

一方、第二話者も第一話者に似た選択率を示している(図2-1)。次に、コソアの複数選択を見ると、第一話者に比べて「コのみ」の割合が小さく、「コとソ」の割合が大きくなっている。また、「ソのみ」の割合は5.3%に止まっている(図2-3)。

以上、図1と図2の場面を比較すると、同じ部屋の中のテレビでも斜め上方にあると遠く感じ、水平方向にあると近く感じる事が分かる。



4.2. 指示対象が画面の中の人物の場合

次に、指示対象がテレビの中の人物の場合について見る。テレビ本体と物理的には同じ距離であるが、「ソ」の選択に大きな違いが見られる。図3に比べて図4の方が話者が指示対象に親近感を持っている場面設定となっている。

図3の「テレビの中の人物(疎)」の場合、話者は指示対象に特に親近感は示していない。この場合、第一話者は「この」と「あの」の選択率がおおよそ7:3で、「その」は選択されてい

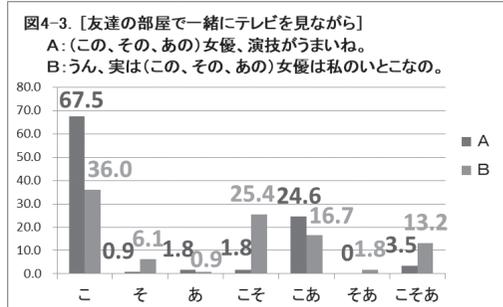
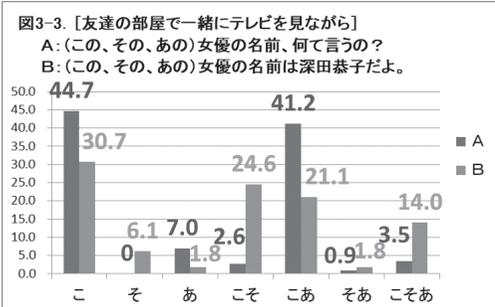
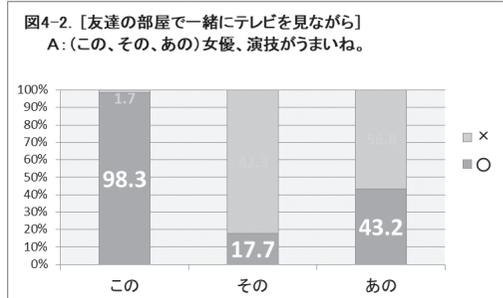
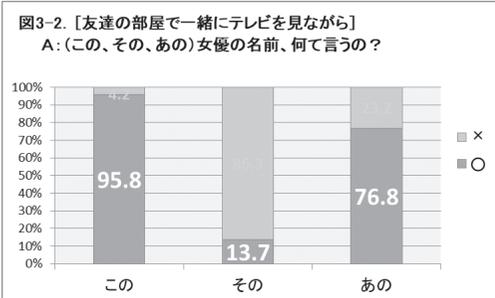
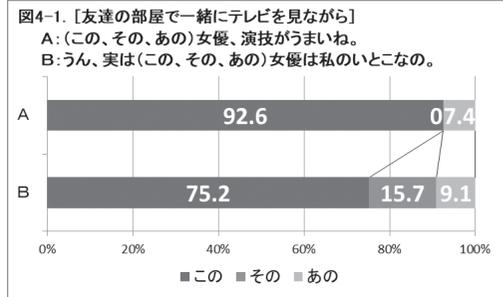
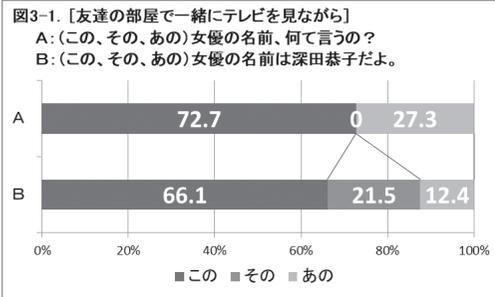
ない(図3-1)。次に、コソアそれぞれの許容度を見ると、「この」は95.8%と高く、「あの」も76.8%と高めになっているが、「その」は13.7%と低くなっている(図3-2)。次に、コソアの複数選択を見ると、「コのみ」が44.7%、「コとア」が41.2%で、この二つで85.9%を占めている(図3-3)。このように指示対象がテレビ中の人物(疎)の場合、物理的にはテレビ本体と同じでも中称の「その」がない点で特徴がある。話者が心理的にテレビの中に入り込み、指示対象を近くに捉えれば「この」を使い、指示対象を話者とは別世界にいるテレビの向こう側の存在と捉えれば「あの」を使うが、その中間の世界はないため「その」は使われないと考えられる。

一方、第二話者も「この」の選択率が66.1%と最も高いが、「その」も21.5%ある点で第一話者とは違いがある(図3-1)。次に、コソアの複数選択を見ると、「その」を含むものの合計は第一話者の7.0%から46.5%に大幅に増えている(図3-3)。このように、第二話者は「その」も2割ほど使う点で第一話者とは違いがある。ただし、この場合の「その」は場面指示ではなく、「あなたの言うその女優」という意味の文脈指示の「その」であると考えられる。

これに対し、図4の「テレビ中の人物(親)」の場合、話者は指示対象に親近感を示している。この場合、第一話者は「この」の選択率が92.6%、「あの」が7.4%で図3より「この」の割合が大きくなっている(図4-1)。次に、コソアそれぞれの許容度を見ると、「この」は図3と同様に98.3%と高いものの、「あの」は43.2%と33.6ポイント低くなっている(図4-2)。次に、コソアの複数選択を見ると、「コのみ」は67.5%で図3より22.8ポイント高くなり、「コとア」は24.6%で図3より16.6ポイント低くなっている(図4-3)。このように指示対象がテレビ中の人物(親)の場合、(疎)の場合と比べて「あの」の許容度が低くなり、その分「あの」の選択率が低く「この」の選択率が高くなっている。これは指示対象を心理的に近く感じると、距離的にも近く感じるためであると考えられる。

一方、第二話者も「この」の選択率が75.2%で、(疎)の場合より高くなる。また、「その」が15.7%ある点で第一話者とは違いがある(図4-1)。次に、コソアの複数選択を見ると、「その」を含むものの合計は第一話者の6.2%から46.5%に大幅に増えている(図4-3)。このように、第二話者は文脈指示の「その」も使う点で第一話者とは違いがある。

以上、先の図2と図3、4の場面を比較すると、第一話者の場合、指示対象がテレビ本体の場合はコソアのいずれも選択されるが、テレビ中の人物の場合はコとアのどちらかのみで、ソは選択されないことが分かる。また、図3と図4の場面を比較すると、話者が指示対象に親近感を持っている方が「この」の選択率が高くなることが分かる。



次に、指示対象が映画の中の人物の場合について見る。この場合、テレビの中の人物よりは話し手と指示対象の物理的距離が遠い。テレビの中の人物と同様に、図5に比べて図6の方が話者が指示対象に親近感を持っている場面設定となっている。

図5の「映画の中の人物(疎)」の場合、話者は指示対象に特に親近感を示していない。この場合、第一話者は「この」と「あの」の選択率がおおよそ1:1で、「その」は選択されていない(図5-1)。次に、コソアそれぞれの許容度を見ると、「この」は90.0%と高く、「あの」も

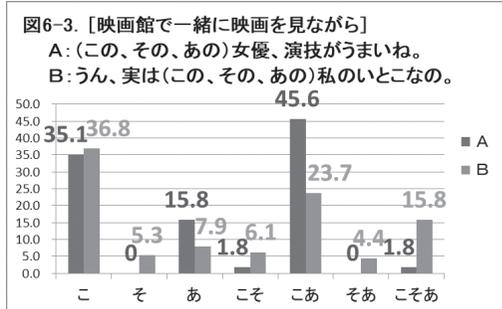
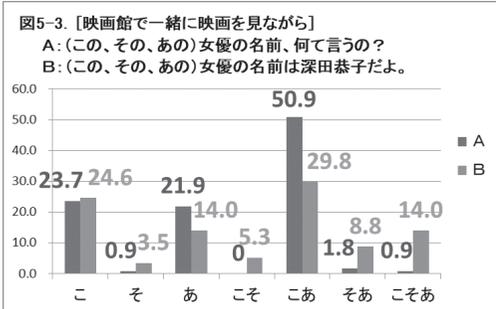
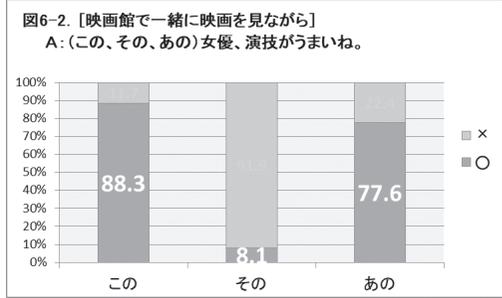
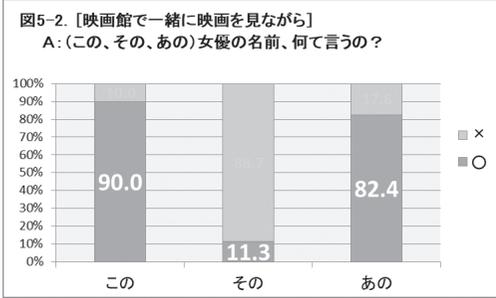
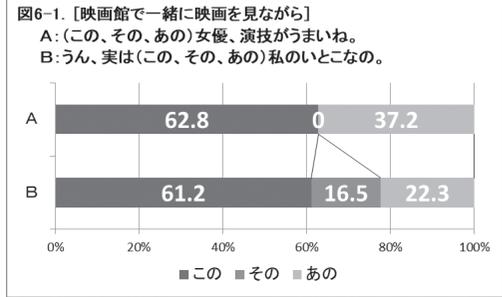
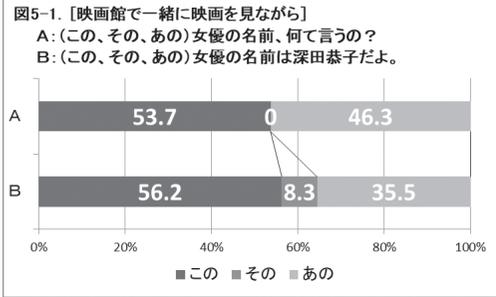
82.4%と高めになっているが、「その」は11.3%と低くなっている(図5-2)。次に、コソアの複数選択を見ると、「コのみ」が23.7%、「アのみ」が21.9%で、テレビの中の人物(疎)の場合より「コ」の割合が小さく、「ア」の割合が大きくなっている(図5-3)。このように指示対象が映画の中の人物(疎)の場合、テレビの中の人物(疎)より「あの」の許容度も選択率も高くなっている。このことから、指示対象を心理的に近く感じると、距離的にも近く感じると考えられる。

一方、第二話者もテレビの中の人物(疎)に比べて「あの」の選択率が高くなっており、相対的に「この」と「その」の選択率は低くなっている(図5-1)。次に、コソアの複数選択を見ると、「あの」を含むものの合計はテレビの中の人物(疎)の38.7%から66.6%に増えている(図5-3)。このように、第二話者もテレビの中の人物(疎)に比べて「あの」を使いやすくなっている。なお、第二話者の「その」はテレビの中の人物の場合と同様に文脈指示であると考えられる。

これに対し、図6の「映画の中の人物(親)」の場合、話者は指示対象に親近感を示している。この場合、第一話者は「この」の選択率が62.8%、「あの」が37.2%で図5より「この」の割合が大きくなっている(図6-1)。次に、コソアそれぞれの許容度を見ると、「この」は図5と同様に88.3%と高いものの、「あの」は77.6%とやや低くなっている(図6-2)。次に、コソアの複数選択を見ると、「コのみ」は36.8%で図5より12.2ポイント高くなり、「アのみ」は7.9%で図5より6.1ポイント低くなっている(図6-3)。このように指示対象が映画の中の人物の場合も、テレビの中の人物の場合と同様に(疎)より(親)の方が「この」の選択率が高くなっている。このことから、指示対象を心理的に近く感じると、距離的にも近く感じると考えられる。

一方、第二話者も「この」の選択率が61.2%で、(親)の場合より高くなる。また、「その」が16.5%ある点で第一話者の0%とは違いがある(図6-1)。次に、コソアの複数選択を見ると、「あの」を含むものの合計はテレビの中の人物(親)の32.6%から51.8%に増えている(図6-3)。このように、この場合も第二話者はテレビの中の人物(親)に比べて「あの」を使いやすくなっている。なお、第二話者の「その」は先と同様に文脈指示であると考えられる。

以上、図5と図6の場面を比較すると、話者が指示対象に親近感を持っている方が「あの」の選択率が高くなることが分かる。また、図3、4と図5、6の場面を比較すると、テレビの中の人物より映画の中の人物の方が「あの」の選択率が高くなることが分かる。これは物理的距離が遠くなると、指示対象を画面の向こう側の世界のものとして認識しやすくなるためであると考えられる。



4. 3. 障害物の有無が関わる場合 (大型スクリーンの中の人物)

次に、図7の「障害物のある場合」と図8の「障害物のない場合」を比較する。図7は「直接見た大型スクリーンの人物」の場合で、図8は「窓越しに見た大型スクリーンの人物」の場合である。いずれも映画のスクリーンと似ているが、映画に比べてストーリー性が弱く、話者が画面の中に入り込みにくい点で違いがある。

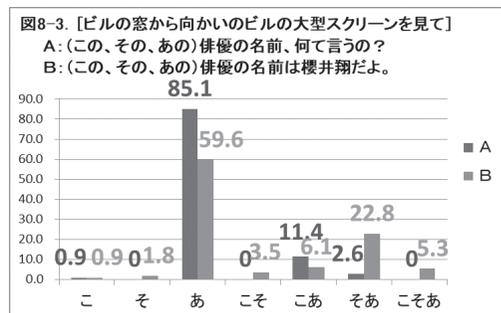
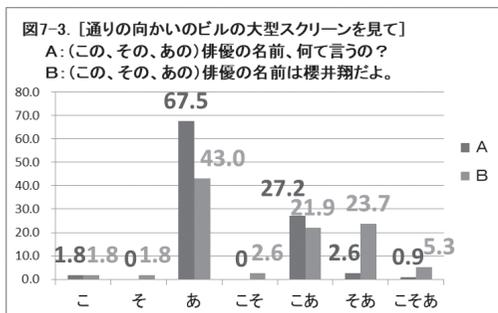
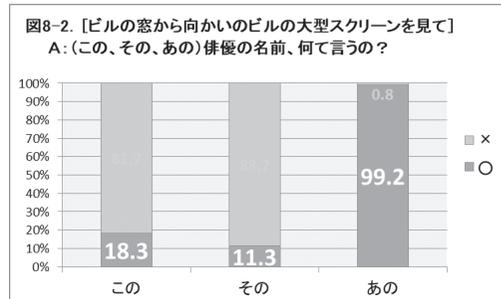
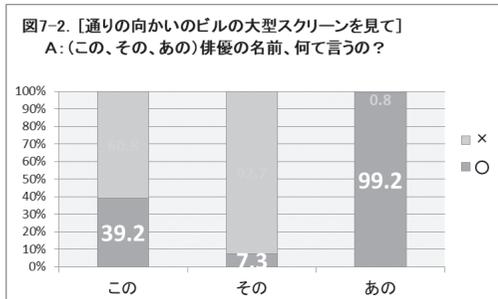
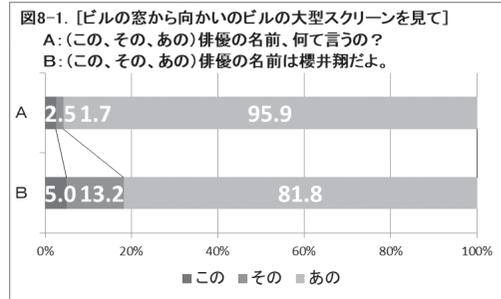
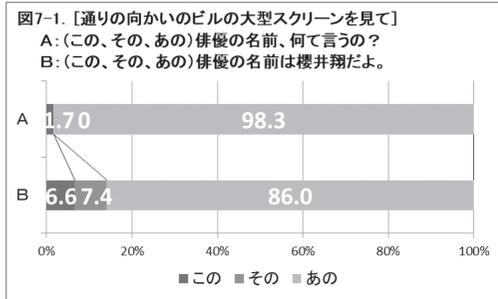
図7の「直接見た大型スクリーンの人物」の場合、第一話者は98.3%の人が「あの」を選択

している(図7-1)。次に、コソアそれぞれの許容度を見ると、「あの」が99.2%と最も高いが、「この」も39.2%ある。しかし、「その」は7.3%しかない(図7-2)。次に、コソアの複数選択を見ると、「アのみ」の割合が67.5%と最も高く、次いで「コとア」が27.2%で、その他はわずかしかない(図7-3)。このように指示対象が直接見た大型スクリーンの人物の場合、「この」もある程度許容されるものの、「あの」の許容度の方が2.5倍も高く、それに引っ張られて「あの」の選択率が100%近くになっている。この点で映画では「この」の選択率が50%を超えているのとは対照的である。これは映画では話者がストーリーの中に入り込んで指示対象を近くに捉えやすいのに対し、通りの向かいの大型スクリーンの場合は通りすがりに見るだけで、ストーリーの中に入り込みにくいためであると考えられる。通りの向かいの大型スクリーンは杉村(2020)で論じた「上空を飛ぶ鳥」や「夜空の星」と同様に、話者は指示対象が物理的に遠くにある点を捉えて「あの」を選択したと考えられる。

一方、第二話者も「あの」の選択率が86.0%と最も高いが、「この」や「その」も7%前後ある点で第一話者とは違いがある(図7-1)。次に、コソアの複数選択を見ると、「アのみ」の割合は43.0%で第一話者より24.5ポイント低くなり、「ソとア」は23.7%で第一話者より21.1ポイント高くなっている(図7-3)。このように、第二話者も指示対象を遠くに感じて「あの」を選択しやすいが、第一話者に比べて「その」の許容度や選択率が高くなる。これはテレビや映画の中の人物と同様に、「あなたの言うその俳優」という意味で文脈指示の「その」が使われていると考えられる。

これに対し、図8の「窓越しに見た大型スクリーンの人物」の場合、第一話者は95.9%の人が「あの」を選択している(図8-1)。これだけ見ると図7に似ているが、コソアそれぞれの許容度を見ると、「あの」が99.2%と最も高いのは図7と同じであるが、「この」は18.3%で図7の39.2%の半分ほどしかない(図8-2)。次に、コソアの複数選択を見ると、「アのみ」の割合が85.1%、次いで「コとア」が11.4%で、図7に比べて「アのみ」の割合が高くなっている(図8-3)。このように指示対象が窓越しに見た大型スクリーンの人物の場合、「あの」の選択率が100%近くある点は直接見た場合と同じであるが、「この」の許容度が直接見た場合より20.9ポイントも低い点で違いがある。このことは、大型スクリーンを直接見た場合は「この」も言えなくもないが、窓越しに見た場合は「この」が言いにくくなることを示している。これは間に障害物があると、こちら側の世界と向こう側の世界に分断され、指示物がより遠くに感じられるためであると考えられる。図7と図8において、選択率だけを比較すると似たような結果になるが、許容度と選択率を合わせて見ることによって、障害物の有無による話者の心理的な許容意識の違いが明らかとなる。

一方、第二話者も「あの」の選択率が81.8%と高いが、「この」も5.0%、「その」も13.2%ある点で第一話者とは違いがある(図8-1)。次に、コソアの複数選択を見ると、「アのみ」の割合は59.6%で第一話者より25.5ポイント低くなり、「ソとア」は22.8%で第一話者より20.2



ポイント高くなっている (図8-3)。このように、第二話者も指示対象を遠くに感じて「あの」を選択しやすいが、第一話者に比べて「その」の許容度や選択率が高くなる。この点は図7の場合と同様である。また、図7-3では「この」を含むものの合計が31.6%であったが、図8-3では15.8%しかなく、「この」の許容度が相対的に低い。これも間に障害物があると、指示物がより遠くに感じられるためであると考えられる。

以上、図7と図8の場面を比較すると、話者と指示対象の間に障害物があると、こちら側の世界と向こう側の世界に分断され、指示物がより遠くに感じられるため「この」の許容度が相対的に低くなると考えられる。

4.4. 音の場合

次に、図9の「音源が見える」場合と図10の「音源が見えない」場合について見る。音源が見えると視覚と聴覚が関わり、それが見えないと聴覚のみが関わるという違いがある。

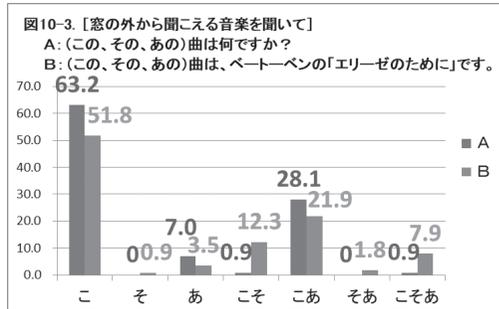
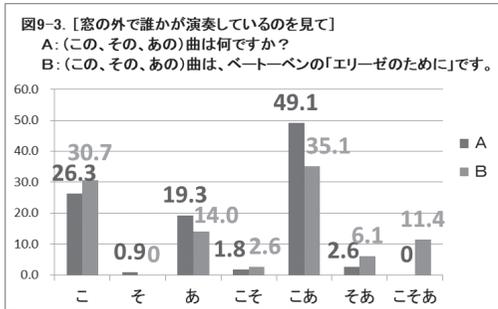
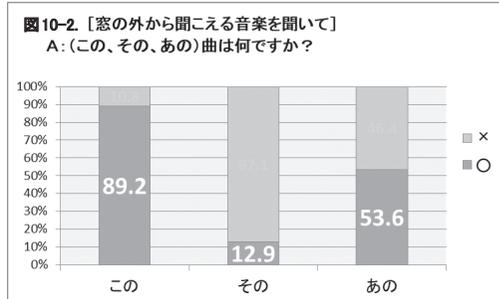
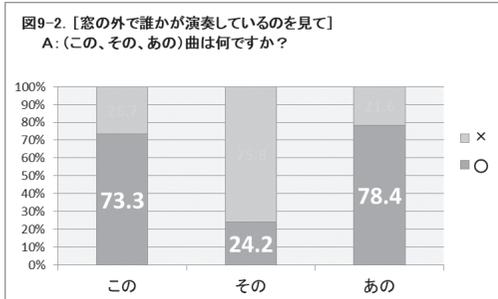
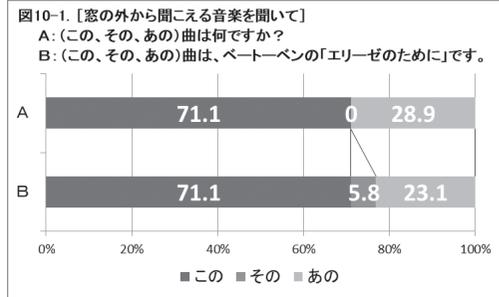
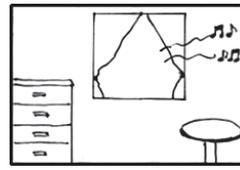
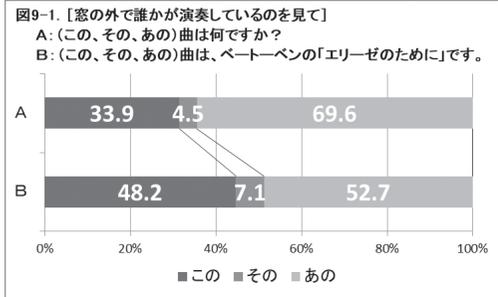
図9の「音源が見える」場合、第一話者は「この」と「あの」の選択率がおよそ1:2で、「その」は4.5%しかない(図9-1)。次に、コソアそれぞれの許容度を見ると、「この」と「あの」が75%前後で、「その」は24.2%と低めになっている(図9-2)。次に、コソアの複数選択を見ると、「コのみ」が26.3%、「アのみ」が19.3%、「コとア」が49.1%となっており、やや「コ」が優勢になっている(図9-3)。音の場合、融合型では話者の耳元に聞こえる音に着目すれば「この」が選択され、音の発生源に着目すれば「あの」が選択されるが、中間の「その」は選択されにくい³⁾。音源が見える場合は、聴覚よりも視覚が優先されて、目に見える遠くの音源を指す「あの」が選択されやすいと考えられる。

一方、第二話者は「この」と「あの」の選択率がおよそ1:1で第一話者より「この」の割合がやや大きく、「その」は7.1%しかない(図9-1)。次に、コソアの複数選択を見ると、「コのみ」が30.7%、「アのみ」が14.0%で、第一話者よりやや「コ」が優勢になっている(図9-3)。

これに対し、図10の「音源が見えない」場合、第一話者は「この」と「あの」の選択率がおよそ7:3で、「その」は選択されていない(図10-1)。次に、コソアそれぞれの許容度を見ると、「この」が89.2%、「あの」が53.6%で、音源が見える場合に比べて「この」は15.9ポイント高く、「あの」は24.8ポイント低くなっている(図10-2)。次に、コソアの複数選択を見ると、「コのみ」が63.2%で、音源が見える場合に比べて36.9ポイント高くなっている(図10-3)。このことから、音源が見えない場合は、話者のイマ・ココが優先されて「この」が選択されやすくなっていると考えられる。

一方、第二話者も「この」と「その」の選択率がおよそ7:1で「この」の選択率が高く、「その」は5.8%しかない(図10-1)。次に、コソアの複数選択を見ると、「コのみ」が51.8%で、第一話者に比べて21.1ポイント高くなっている(図10-3)。このことから、第二話者の場合も話者のイマ・ココが優先されて「この」が選択されやすくなっていると考えられる。

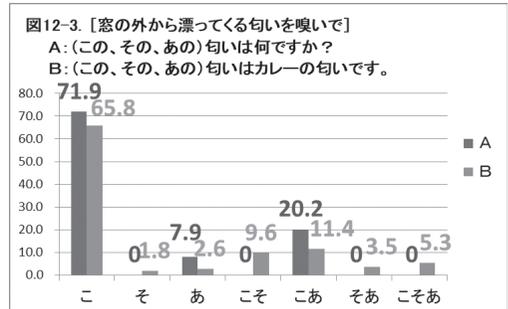
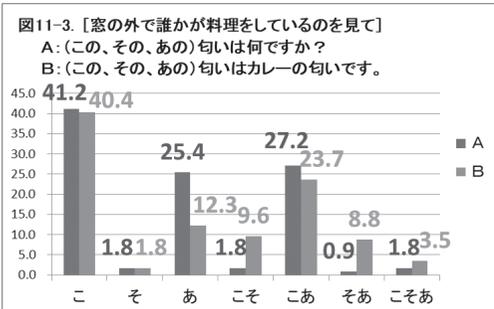
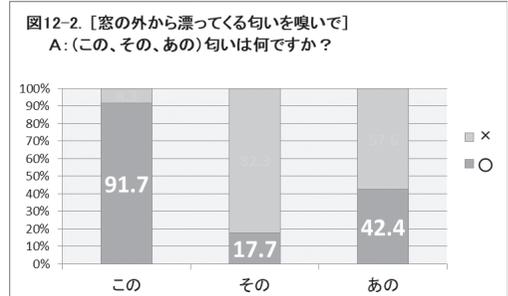
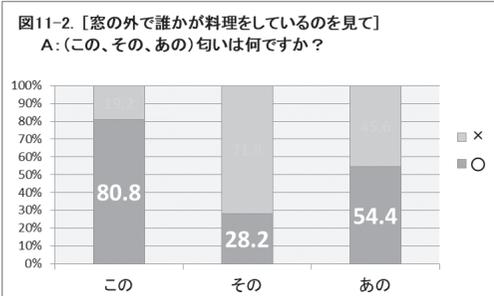
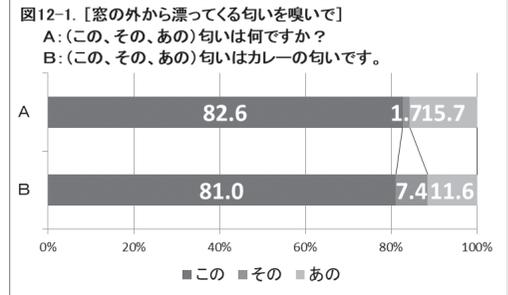
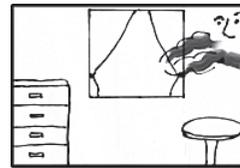
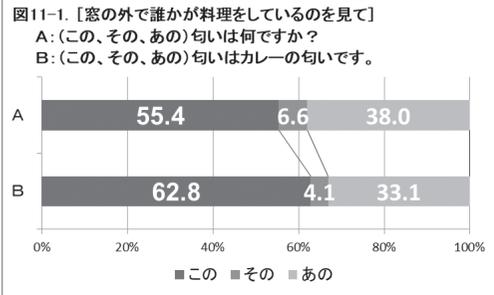
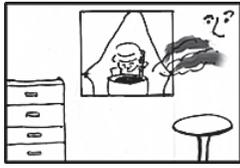
以上、図9と図10の場面を比較すると、音源が見えると視覚的に遠くの音源に意識が行って「あの」が選択されやすく、音源が見えないと話者のイマ・ココの音に意識が行って「この」が選択されやすくなると考えられる。



4.5. においの場合

次に、図11の「においの発生源が見える」場合と図12の「においの発生源が見えない」場合について見る。においの発生源が見えると視覚と聴覚が関わり、それが見えないと聴覚のみが関わるという違いがある。

図11の「においの発生源が見える」場合、第一話者は「この」と「あの」の選択率がおおよそ3:2で、音の場合より「この」割合が大きくなっている。また、「その」は6.6%しかない



(図11-1)。次に、コソアそれぞれの許容度を見ると、「この」の許容度は80.8%、「あの」は54.4%で、音の場合より「あの」の許容度が低くなっている。また、「その」は28.2%と低めになっている(図11-2)。次に、コソアの複数選択を見ると、「このみ」が41.2%、「アのみ」が25.4%、「コとア」が27.2%となっており、音に比べて「このみ」が優勢になっている(図11-3)。このように音の場合と同様に、においの場合も、融合型では話者の近くに漂うにおいに着目すれば「この」が選択され、においの発生源に着目すれば「あの」が選択されるが、中

間の「その」は選択されにくい。しかし、音に比べるとにおいの方が話者のイマ・ココにあるにおいに反応して「この」が選択されやすいようである。

一方、第二話者は「この」と「あの」の選択率がおよそ2:1で第一話者より「この」の割合がやや大きく、「その」は4.1%しかない(図11-1)。次に、コソアの複数選択を見ると、「コのみ」が40.4%、「アのみ」が12.3%、「コとア」が23.7%となっており、音に比べて「コのみ」が優勢になっている(図11-3)。

これに対し、図12の「においの発生源が見えない」場合、第一話者は「この」と「その」の選択率がおよそ5:1で、「その」は選択されていない(図12-1)。次に、コソアそれぞれの許容度を見ると、「この」が91.7%、「あの」が42.4%で、においの発生源が見える場合に比べて「この」は10.9ポイント高く、「あの」は12.0ポイント低くなっている(図12-2)。次に、コソアの複数選択を見ると、「コのみ」が71.9%で、においの発生源が見える場合に比べて30.7ポイント高くなっている(図12-3)。

一方、第二話者も「この」と「その」の選択率がおよそ8:1で「この」の選択率が高く、「その」は7.4%しかない(図12-1)。次に、コソアの複数選択を見ると、「コのみ」が65.8%で、においの発生源が見える場合に比べて25.4ポイント高くなっている(図12-3)。

以上、図11と図12の場面を比較すると、においの発生源が見えない場合は、第一話者も第二話者もおい発生源が見える場合に比べて「この」の許容度や選択率が高くなる。このことから、においの発生源が見えない場合は、話者のイマ・ココが優先されてより「この」が選択されやすくなっていると考えられる。また、図9、10と図11、12の場面を比較すると、第一話者も第二話者も音よりにおいの方が話者のイマ・ココにある刺激に反応しやすいことが分かる。

5. まとめ

以上、本稿では二者会話場面における日本語の現場指示における「この」「その」「あの」の選択について、3種類のアンケート調査の結果をもとに許容度と選択率の観点から考察した。その結果を表3に整理する。

表3 許容度と選択率のまとめ

		指示対象	第一話者 (A)	第二話者 (B)		
視覚	融合型	1. 部屋の壁掛けテレビ	「コ」「ソ」「ア」の順に許容度が高くなり、「コ」「ソ」「ア」の選択率はおよそ1:1:2になる。	第一話者に比べて「ア」の許容度が低くなり、「コ」「ソ」「ア」の選択率が同じぐらいになる。		
		2. 部屋のテレビ	「ア」「ソ」「コ」の順に許容度が高くなり、「コ」「ソ」「ア」の選択率はおよそ15:5:1になる。	第一話者に比べて「コのみ」の割合は低くなるが、選択率はほぼ同じになる。		
		3. テレビの中の人物(疎)	話者が心理的にテレビの中に入り込み、指示対象を近くに捉えれば「コ」、指示対象をテレビの向こうの別世界の存在と捉えれば「ア」を使う。その中間の世界はないため「ソ」は使わない。	テレビより映画の方が「ア」の許容度や選択率が高い。親より疎の方が「ア」の許容度や選択率が高い。	場面指示の「コ」と「ア」だけでなく、文脈指示の「ソ」も使われる。	テレビより映画の方が「ア」の許容度や選択率が高い。親より疎の方が「ア」の許容度や選択率が高い。
		4. テレビの中の人物(親)				
		5. 映画の中の人物(疎)				
		6. 映画の中の人物(親)				
		7. 直接見た大型スクリーンの人物	指示対象を遠く感じて「ア」が選択されやすい。	話者と指示物の間に障害物があると、こちら側と向こう側の対立が明確になり、「コ」の許容度が相対的に低くなる。	指示対象を遠く感じて「ア」が選択されやすい。文脈指示の「ソ」も使われる。	話者と指示物の間に障害物があると、こちら側と向こう側の対立が明確になり、「コ」の許容度が相対的に低くなる。
		8. 窓越しに見た大型スクリーンの人物				
聴覚	融合型	話者の耳元の音に着目すれば「コ」、音源に着目すれば「ア」が選択される。音源が見えないほうが「コ」の許容度や選択率が高くなる。				
		9. 音源が見える場合	「コ」と「ア」の選択率がおよそ1:2になる。「ソ」は少ない。	第一話者に比べて「コ」の許容度や選択率が高くなる。		
		10. 音源が見えない場合	「コ」と「ア」の選択率がおよそ7:3になる。「ソ」はなし。	第一話者に似た選択率となる。		
嗅覚	融合型	話者の近くのおいにおいに着目すれば「コ」、においの発生源に着目すれば「ア」が選択される。においの発生源が見えないほうが「コ」の許容度や選択率が高くなる。音よりにおいの方が「コ」の許容度や選択率が高くなる。				
		11. においの発生源が見える場合	「コ」と「ア」の選択率がおよそ3:2になる。「ソ」は少ない。	第一話者に比べて「コ」の許容度や選択率が高くなる。		
		12. においの発生源が見えない場合	「コ」と「ア」の選択率がおよそ5:1になる。「ソ」は少ない。	第一話者に似た選択率となる。		

付記：本稿は平成28-32年度科学研究費基金（基盤研究(C)）「中国人日本語学習者におけるポर्टフォリオ型学習データベースの構築と文法習得の研究」（研究代表者：杉村泰、課題番号16K02809）による研究成果の一部である。

注

- 1) 李 (2010) の問題点については杉村 (2017b) で論じている。
- 2) テスト①や③に比べてテスト②は、第一話者における回答の影響が第二話者に出やすく、第一話者がコを使った場合、ソを使った場合、アを使った場合に分けて調査しなければならず、アンケートが煩雑になるためである。
- 3) 杉村 (2020) で見たように、対立型の場合は音やにおいても「その」が選択される。

引用文献

- 李賢淑 (2010) 「現場指示使用に見られる認識の差に関する韓日対照研究—現場指示の融合型を中心に—」『日語日文学』45, pp. 177-196. 大韓日語日文学會
- 杉村泰 (2016) 「話し手と聞き手の日本語指示詞選択の違い」劉曉芳・徐曙・曹大峰(主編)『日語教育与日本学』第9輯, pp. 15-23. 華東理工大学出版社
- 杉村泰 (2017a) 「二国会話場面における日本語の指示詞コソアの選択—南国商学院でのアンケート結果—」秦明吾(主編)『21世紀新視野下的日語教学与研究』, pp. 32-44. 北京語言大学出版社
- 杉村泰 (2017b) 「二国会話場面における日本語の「この」「その」「あの」の選択—日本語母語話者と中国人上級日本語学習者の比較—」『日本語/日本語教育研究』[8] 2017, pp. 21-36. 日本語/日本語教育研究会, ココ出版
- 杉村泰 (2017c) 「日本語の指示詞「この」「その」「あの」の選択—画面の中の人物の場合—」『日本語文化研究』第六輯, pp. 18-23. 大連理工大学出版社
- 杉村泰 (2017d) 「二国会話場面における日本語の「この」「その」「あの」の選択—日本語話者と韓国人上級日本語学習者の比較—」『日本語教育』第82輯, pp. 39-52. 韓国日本語教育学会
- 杉村泰 (2020) 「日本語の現場指示「この」「その」「あの」の選択(1)—許容度と選択率の観点から—」『名古屋大学人文学研究論集』第3号, pp. 157-173. 名古屋大学人文学研究科

キーワード：指示詞、現場指示、「コソア」、許容度、選択率

摘要

日语现场指示词「この」「その」「あの」的选择性问题(2)
——从容许度与选择比例看说话人的选择意识——

杉村 泰

本文基于容许度和选择比例的视点,通过三选一测试、正误判断测试和多选测试三种方式,对日语中表示现场指示的“この”、“その”、“あの”的选择性问题进行了考察与论述。每种测试有32题,题目的形式为AB对话,如例(1)、例(2)。本文针对每种测试中的12道题进行了分析与考察。

(1) [友達の部屋で新品のテレビを見つけて]

A:(この、その、あの) テレビ、どこで買ったの?

B:(この、その、あの) テレビは秋葉原で買ったんだよ。

(2) [友達の部屋で一緒にテレビを見ながら]

A:(この、その、あの) 女優の名前、何て言うの?

B:(この、その、あの) 女優の名前は深田恭子だよ。

此次调查厘清了说话人自身的容许度(内心接受程度)与选择比例(实际选择的结果)之间的关系,并发现在实际的场景中说话人会选择“その”,但通过图片选择时说话人却并不倾向于选择“その”。

关键词:指示词,现场指示,“コソア”,容许度,选择比例